

日本の産業遺産に学び 建設業の未来を描け！

～北海道の開発と交通インフラ整備の歴史 そして未来は？～

背景写真：三池港・閘門式ドック（福岡県大牟田市）

1908年（明治41年）完成 / パナマ運河と同形式の水位調整閘門、この完成で船渠内では1万トン級の船舶荷役が可能となった。写真提供：産業遺産情報センター

日時

令和7年6月23日 月 12:55～16:55
2025年

開催場所

Web Zoom（WEB会議アプリ）にて全国域配信予定

申込方法

弊社ホームページの受付フォームからお申し込みください

zoom
Webセミナー
受講無料
定員1000名

講演会次第

開会挨拶	12:55～13:00	一般社団法人 建設イノベーション推進機構 代表理事 山口 篤志
第Ⅰ部	日本の産業遺産に学ぶものそして北海道における産業遺産の意義・動向	
基調講演 終了後質疑応答 10分	13:00～14:30	「日本の産業遺産と未来へ引き継ぐもの」 元内閣官房参与、産業遺産情報センター センター長、(財) 産業遺産国民会議 専務理事、 国家基本問題研究所 評議員、内閣官房産業界プロジェクトチームコーディネーター、 「明治日本の産業革命遺産」世界遺産協議会コーディネーター 他 講師：加藤 康子
	14:40～14:50	休憩
講演・1 終了後質疑応答 5分	14:50～15:35	「北海道の産業遺産と社会インフラ整備の歴史」 ～ 水運・運河から港湾・道路・鉄道整備へ～ 北海道産業考古学会 会長、日本産業技術史学会理事、 北海道大学総合博物館 資料調査研究員、北海道遺産協議会監事 他 講師：山田 大隆
	15:40～15:45	休憩
第Ⅱ部	住み続けられる国土と北海道のインフラ整備のあり方	
講演・1 終了後質疑応答 5分	15:45～16:45	「人と道路インフラの新たな関係づくり」 室蘭工業大学名誉教授、国土交通省 社会資本整備審議会 道路分科会委員、 北海道防災会議地震火山対策部会 地震専門委員会委員 他 講師：田村 亨
閉会挨拶	16:50～16:55	一般社団法人 建設イノベーション推進機構 専務理事 下川 俊克

背景写真：別荘谷橋（べっそだにばし）徳島県阿波市 / 2020.11月完成 超高耐久橋梁「Dura-Bridge®」＝鉄筋 & PC 鋼材未使用の“さびない橋”

受賞：2021：土木学会賞、2022：fib/国際コンクリート連合「特別賞」、PC 工学会賞、日本クリエイション大賞「インフラ技術賞」
共同開発者・写真提供：西日本高速道路（株）& 三井住友建設（株）

主催：一般社団法人 建設イノベーション推進機構

共催：公益社団法人 土木学会 土木史委員会 / 北海道産業考古学会

後援：北海道開発局、北海道、札幌市、北海道開発技術センター、北海道道路管理技術センター、
北海道河川財団、石狩川振興財団、北海道建設業協会、北海道建設技術センター、
建設コンサルタンツ協会北海道支部、日本技術士会北海道本部、北海道測量設計業協会、
北海道新聞社、北海道建設新聞社、北海道通信社（順不同）

協賛：岩田地崎建設（株）、伊藤組土建（株）、（株）草別組

（株）ドーコン、（株）構研エンジニアリング、（株）開発調査研究所、（株）シン技術コンサル、
日本データーサービス（株）、北海道土木設計（株）、アースコンサルタント（株）、新和測量（株）
（株）アイ・ティ・エス

お申込みはこちらから

IPAC 一般社団法人 建設イノベーション推進機構
<https://www.ipac.or.jp/event20250623/>



日本の産業遺産に学び 建設業の未来を描け！

～ 北海道の開発と交通インフラ整備の歴史 そして未来は？ ～

講演会の主旨・概要

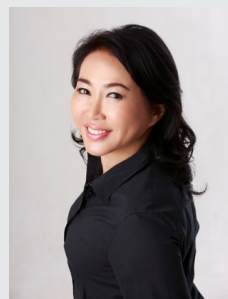
IPAC は、2016 年（平成 28 年）設立以降 北海道のインフラ整備に関する諸分野（道路・河川・港湾・農業など）について「明治期以降の歴史的経緯」を土木技術史的観点から辿るとともに「技術の継承」という視点から「未来への提言」を主旨とした講演会を実施してきました。この間の 7 回の講演会を一巡目とすると、今後は、二巡目の新しい段階に入ることになります。この最初の年にあたる今回の講演会では、「技術を歴史的に学ぶ第一歩」として、近代技術の曙である「明治産業革命」および「革命以降の技術的展開（発展）の歴史」を改めて振り返る場としたいと考えます。幕末から始まる「明治産業革命」は、わずか半世紀足らずで「工業国」日本の土台を築き、日本の近代を拓きました。これは世界に冠たる業績と言えましょう。この歴史的展開を踏まえここでは、「産業革命遺産（世界遺産登録）」・「推薦産業遺産」・「土木遺産」等の研究、教育・普及活動を通じて明らかにされた過去・現在・未来につながる技術史（産業史・土木史等含む）研究の意義・役割について学びます。現代に生き、未来に歩みを進める我々は今、この産業革命を成し遂げた日本人の叡智とその姿、活力を真摯に学び、「技術立国」日本としての振興、そして「技術の継承」にも更に注力しなければなりません。そのうえで将来の建設業がどうあるべきかを学びます。

第Ⅰ部「日本の産業遺産に学ぶもの そして北海道における産業遺産の意義・動向」

基調講演：「日本の産業遺産と未来へ引き継ぐもの」

講師：加藤 康子

産業遺産は、市井の人の営みの記憶である。営みを支えてきた人々の記録や遺産は、日本国民が生きてきた記録や記憶として、かけがえのない教育資産である。その活用によりまちづくりに活かすことで、限界集落が蘇った例は世界に多数ある。産業はグローバルなので、一自治体が単独で絵を描くよりマクロな視点で産業の全体像や進化がわかるような保存努力が必要だろう。日本が国力をつけた時代は二つある。一つは明治時代、もう一つは昭和の戦後の復興である。私が関わってきた明治日本の産業革命遺産は、8 県 11 市に立地する 23 の構成資産で一つの世界遺産価値を有する製鉄・製鋼、造船、石炭産業における、急速な産業化の歴史である。全体で世界遺産の価値があり、幕末から明治にかけてわずか半世紀で工業立国の土台をつくっていった進化の道程を願っている。明治における産業日本の勃興は世界史において特筆すべき出来事だった。北海道には開拓の歴史と、明治の近代化の産業遺産があり、空地炭鉱、小樽、室蘭、鉄道、港など、素晴らしい遺産は沢山あり、ぜひ未来のまちづくりに活かしてほしい。



講演 1：「北海道の産業遺産と社会インフラ整備の歴史」

講師：山田 大隆

～水運・運河から港湾・道路・鉄道整備へ～

北海道は、明治政府北海道開拓使により、ケブロン報文と提言（1875 年）を基に、殖民地開発型技術の導入で、日本の先駆的技術立地地区として開発された。開発の目的は、資源開発（石炭、森林ほか一次産品）と北方防衛だが、中心の前者では、上記技術最大特色の輸送体系整備が重視された。その技術は欧州定着の大規模河川水運、港湾建設、内陸運河開削から、鉄道・導路網整備で発展した。北海道開拓技術史視点で、主に輸送産業遺産（炭鉄港）の内容と評価、利活用の展望を考察する。



第Ⅱ部「住み続けられる国土と北海道のインフラ整備のあり方」

講演 1：「人と道路インフラの新たな関係づくり」

講師：田村 亨

25 年後の 2050 年、北海道の人口は現在よりも約 130 万人少ない 382 万人になると予測されている。一方、2022 年からの生成 AI の進化は、AI が人間同様に情報欠損や将来の様子を想像で補える可能性を高めている。国は人口減に悩む地方部の活性化とインフラ維持方策のひとつとして、AI による「生産性向上と省力化」を謳っている。インフラ整備で重要なことは、インフラを地域の共通財産として育ててゆくという利用者や住民の当事者意識醸成である。



※講師プロフィール詳細は、IPAC ホームページ「講師のご紹介」よりダウンロード下さい

参加お申し込み方法

以下の URL にアクセスして、専用の申込フォームよりお申し込みください。

お申し込み期限は 6 月 20 日金曜日までとさせていただきます。

<https://www.ipac.or.jp/event20250623/>

お問合せは Mail にて承ります Mail：ipac@it-systems.co.jp



一般社団法人

建設イノベーション推進機構

Innovation Promotion Agency for Construction

